
淵物語 こよみキラー

モブキャラA

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

淵物語 こよみキラー

【Zコード】

Z9182Z

【作者名】

モブキャラA

【あらすじ】

少女は路上で目を覚ますと、記憶の一切を失っていた。自身が何者であるかを考察する間もなく、謎の怪異に襲撃を受ける。万事休す。打つ手のない窮境に絶望していると、そこに偶然に阿良々木暁が通りかかり。。

プロローグ（前書き）

傾物語的な作風を意識しますた。西尾維新が好きなだけのただの雑魚ですが、暇潰し程度には貢献できれば嬉しいです。

プロローグ

聖なる夜と呼ばれて然るべき12月24日の夜中。25日を僅か数十分後に控えた人々が賑わう中で、阿良々木暦は狂気に駆られていた。彼が何者かに対しても明確な殺意を抱いたのは、おそらくは春休み以来である。ただし、あの頃とは異なり、彼が狂氣から解放される手段は、目的の達成　　とどのつまり対象の殺害以外には有り得ないだろう。

「絶対に許さない　　お前だけは　　絶対に！」

目を凝らせば骨すらも露出していることが伺えるほどにえぐられた右肩。

おそらくは彼自身のものであろう血飛沫によつて、赤く染められた直江津高校の制服。

そして彼の隣で力無く横たわる一人の少女、戦場ヶ原ひたぎ。人々が遊興に勤しむことを意図して建設された遊園地の、まだ使用されていない準備中のお化け屋敷は、もはやどうしようもなく惨劇の場へと変貌を遂げていた。私はそれをただ見ていることしか出来ない。吸血鬼と人間のヴァンパイアハーフである私には、ただ見ていることしか出来なかつた。

そして私は回想する。

今に至るまでの物語を。
今に至るまでの過ちを。
過ちに至るまでの過ちを。

プロローグ（後書き）

やめて、石は投げないで石はッ！

ふみわびくわ（前書き）

オリキヤラが主人公といつのはどうなのだらうかと思こます。やはりメインをメインにするべきだったかも。

ふみひとワカシド

酩酊しているかのような頭痛と共に、私は目を覚ました。激しい吐き気や不快感に襲われながらも、なんとか気を確かに保つと冷静に思考を廻らす。

思い出せ、私はどうしてここにいる？ 私？ 私とは誰だ？

…………。

よし、一度言つてみたかったんだ。

「私は誰？ ここは何処？」

しかし不思議だ。何一つとして思い出せないにも関わらず、その台詞を一度言つてみたかったということは明確に覚えている。それに、当然の如く日本語を操れることからも、やはり記憶喪失ということで間違いないだろう。決して記憶が消失したわけではない。

ふと、辺りを見渡す。特に描写すべき点も見当たらない。「ごくごく普通の公園だった。ただ一つ異様なのは、まったくと言つていいほど人の気配が感じ取れないという点のみだ。おそらくド田舎であるという認識で間違いないだろうけれど、それにしても寂しい街だなあ。

「あ」

出口付近に地図がある。

私は近所に助けになりそうな建築物がないかどうかを確認するべく出口付近の地図を確認しに行つた。一步一步の力が思つていたよりも力強く、予想していたよりも早く地図に辿り着いた。

「あ」

交番を見つけた。幸いなことに割りと近所にある。

「よし、見つけたぞ！」

「よし、見つけたぜ！」

木靈のように同じ口調、同じ聲音で誰かが復唱した。

しかし残念なことに、最後の一文字だけ間違っている。

「 ッ！」

咄嗟に声の主に目を向ける。

そこには、学ランを着用した童顔の少年が立っていた。道を聞けば教えてくれそうな、どう見ても害のある存在には見えなかつた。けれど、私の中の生物としての本能は、そうは言つていなかつた。私に対して強く訴えかけていた。

逃げる！

「ええっと、誰ですか？」

「ひ……酷いよ！ 覚えてないなんて！ 僕達友達だろー！」

心底悲しそうな表情でそう言つ少年。しかし私には、その少年の全てが白々しく映つた。

「い……ごめんね、記憶喪失なんだ」

「記憶喪失！？ 那は大変じゃないか！ どうして早く僕に言ってくれなかつたんだ！ 全部僕にまかせて、僕達は親友なんだからね！」

「そりなんだ…… ありがとうね……」

信用しきつた声音で私はそう言つた。しかし本音は、隙あれば逃げるという考えだ。背を向けた瞬間に逆方向に逃げてやる。

「僕についてきて

少年が背を向けた。

私はその隙を逃さなかつた。

少年が足を一步前に踏み出すよりも素早く、私は脚に混信の力を込めて地面を蹴つた。何度も何度も蹴り続け、あつという間に塀を飛び越え、公園から脱出した。

ここまで来れば大丈夫だろう。

「どこまで行つても大丈夫じゃないよ

ぐちやり。

何かが潰れるモロい音がした。

その音が私の耳を駆け巡ると同時に、腹部に尋常ではない激痛が

走つた。

反射的に腹部に目を向ける。

そこには、噴水のように激しく血液が噴出していた。

そのことを認識した途端、今までを遙かに上回る激痛が私に襲い掛かった。

「うん、いい音だ

少年は、健気な口調でそう言った。

あ、記憶喪失といつては、

一 文 爾 文 一 だよ

一
文
爾

それが私を。

そして暦ちゃんを地獄の底へと突き落とす人でなしの名前だ。

チックショウ!

私は一文爾に體を向ふなどひたすら走り繕けた

腹部をあのレベルで損傷しておきながら走れるというのは不思議なものだが、しかし人間、極限状態になると大抵のことはできるものらしい。とは言え、今はそんなことを言つてはいる場合ではないだろ。

「ダメだよ動いちき！ 怪我をしてるじゃないか！」
心底心配そうな聲音で一文爾は言った。

ふざけた奴だ

ふぬけた奴だ

三九二

荒々しく息を吐き 懸命に脇話を抑えながら和は曲がり角を
覚束無い足取りで曲がった。

ダメだ

意識が遠のいていく

と。

そこに、二人の男女が通りすがつた。

驚愕の表情を浮かべる少年と、無表情な女性。

「おい！ お前 大丈夫か！？」

まるで自分のことのように駆け寄る少年。

それが、暦ちゃんとの最初の出会いだつた。

ふみわらじトラック（後書き）

暦ちゃんの格好良さは異常。

惚れてしまつやろ！

ひたすら暦が格好良いだけのお話です。

よくあるフレイク（前書き）

影縫さん無双です。

よみがえるフレイク

「たす……けて……」

今にも消えてしまいそうな儚い声音で私は助けを求めた。

「しつかりしる！　おい！」

懸命に呼びかける少年。

しかし、私にはその声に反応する余力はもはや残されていなかつた。

「大丈夫やと思うで、鬼畜なお兄やん」

堀。

ショートカットだとか、京都弁だとかそんなことはもはやビリでもいい。

その女性は、堀の上を歩いていた。

覚束無い意識の中でもその光景だけは鮮明に頭に焼きついた。

「何が大丈夫なんですか影縫さん！」

少年が言った。いたつて正論だ。もつと言え。

「何がもへつたくれも、その可愛らしい女の子は

「やあ、僕だよ！」

奴が来た。

マズい、この人達を巻き込んでしまう。

なんとかしないと！

「あれ……葵ちゃん？　どうしたんだい葵ちゃん！？　大怪我じゃ

ないか！　救急車を呼ばないと！」

一文爾はカルチャーショックを受けたかのような様子でそう言つと、ぼろぼろ涙をこぼしながら私の元へ駆け寄ってきた。

「…………だ……め…………」

まともに喋ることすらままならなかつた。

やがて一文爾は目と鼻の先まで接近してきた。

それと同時に、私は確實に死へと接近していた。

もう駄目だ……。

覚悟を決めたその刹那、一文爾が遙か向こう側へとぶつ飛んでいつた。

一瞬何が発生したのかが分からなかつた。が、一瞬後には全てを把握した。

影縫さんと呼ばれるが蹴飛ばしたのだ。

「何を！」

少年が怒鳴つた。

「落ち着きや、鬼畜なお兄やん　　あれは人やない」

「人じやない？　……まさか怪異？」

「ああ、まあともあれアイツをどうにかするのが先決やろ」

一文爾が覚束無い足取りでこちらに戻つてくる。

身体中傷だらけで、腕や脚がはぐちゃぐちゃに捻じ曲がつていた。「酷いなあ、いきなり何をするんだい！　暴力なんか振るつたつて、何にも解決しないよ！」

一文爾は相変わらずの口調でそつと言つた。

「チツ、化物が」

言うが、貴方も十一分に化物だ。

その刹那、影縫と呼ばれるその女性は、大きく跳ねた。

遠方でこの世のものとは思えない大立ち回りが展開されている。もはやはつきりとしない視界の中で、私が捉えられる存在は少年だけだつた。

少年は懸命に私を励ましている。が、何を言つていいのかまではよく聞こえなかつた。

不安を与える地響きすらも、やがて感じ取れなくなつていつた。

……少し眠ろう。

あるフレイク（後書き）

影縫せんかつじよす。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9182z/>

淵物語 こよみキラー

2011年12月28日22時52分発行